

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

日本大学消化器外科での国内外科研修

大阪労災病院外科

古賀 陸人

日本臨床外科学会の国内外科研修については学会の雑誌で今までの報告書を読んで存在を知ったときから興味を持っていた。若手外科医が最大4週間国内の他の施設を研修できるという魅力的なシステムであるが、申請基準が40歳以下であることから、次の誕生日に40歳になる僕にとってはこれがラストチャンスかもしれないと思いながら、2019年5月末の締め切り直前に応募書類を提出した。6月になり、研修者に選出されると連絡を受けると今度は贅沢な悩みに直面した。自分の専門である肝胆膵外科の研修施設の候補は20施設もあり、どこも名の知れた施設ばかりで、なかなか決めきれなかった僕は何人かの知り合いに相談することにした。すると誰もが迷うことなく、高山先生を薦めてくれた。肝臓の手術をもっとうまくなりたいと思いを抱き、研修先は日本大学消化器外科を選択することとした。そこから肝臓手術のパイオニアである高山先生のところで研修を受けたいという思いが日に日に強くなっていった。

2020年1月20日から2月9日までの3週間、日本大学消化器外科で研修することになった。研修期間は病院から徒歩10分強のウィークリーマンションに生活の拠点を置くこととした。1月20日の朝は7時30分にカンファレンスから始まった。術前術後カンファレンスは月水金の週3回、朝7時30分から開催され、活発な意見交換を経て最適な治療法が選択されていた。カンファレンスのあとはよいよ手術となるが、その手術スケジュールに初日から驚かされた。なんと並列で肝切除が3例も行われたのだ。肝臓を専門にするスタッフが豊富にいる日本大学だからこそできる芸当を見せつけられた。しかも日本大学消化器外科で行われる症例はどれも一筋縄ではいかない症例ばかりでレベルの高い肝切除を初日から見せつけられた。さすが肝切除の症例数が日本一の施設だと思い知らされた。

日本大学消化器外科で研修することが決まった時から学びたいと思っていた手技がある。それはclamp clushing法による肝切離である。今まではCUSAを用いた肝切離を学んできたが、CUSA以外の肝切離法を知っておくことは今後役に立つと考えていた。まずは数例手技を見て学び、2週目には実際に自分でclamp clushing法による肝切離を行う機会も得た。人がやっているのを見るとそこまで難しくなく映ったのだが、いざ自分で行うと全然うまくできなかった。そして最終週にはさらにうれしい出来事が待っていた。何と高山教授の前立ちで肝部分切除を執刀する機会を得た。手術中は鉗子の使い方に始まり、切離の仕方まで直々に熱い指導を受けることができた。いつも以上に緊張しながら行った手術では改めて基本手技の重要性を認識させられた。術中に撮影した写真をみると今でも興奮してしまう。

肝切除以外には膵頭十二指腸切除術が印象に残っている。膵頭十二指腸切除術の再建方法にかなり特色がある。Soft pancreasの症例では膵液瘻の発生をおさえるために二期的再建を選択しており、1回目の手術では膵消化管吻合は行われない。学会の報告でこの術式について聞いたことはあったのだが、実際にみるのは初めてで、この再建法を採用している施設は日本でも数少なく、一見する価値があったと思う。

手術だけでなく、病棟管理についても学ぶことができた。病棟は3～4名の医師が1グループとなり、計3グループが病棟管理を行っていた。僕はこの中のひとつのグループ(中山先生・三塚先生・山岸先生)の配属となり、3週間は手術以外の時間を一緒に過ごし、高山イズム満載の病棟管理を満喫することが

できた。

最終週には一つ楽しいことが待っていた。それは高山教授と医局長の青木先生との食事会である。銀座のシンボルである時計台が見えるフランス料理店で味もさることながら、普段は聞くことがなかなかできない高山教授の昔話などを聞くことができ、有意義な時間を過ごすことができた。

本研修は3週間と限られた期間であったが、手術見学ではなく、一スタッフとしてみっちり研修させていただいたことでいろんな面で刺激を受けるとともに、一方で自分のしてきたことにも自信を持つことができた。自分と同世代が頑張っているところをみて、彼らに負けないようにさらに頑張っていかなければいけないという思いが湧いてきた。そして若手外科医にはぜひこのシステムを活用してほしいと思う。自分の施設以外のやり方を学べることは非常に貴重な経験になると思う。

最後に、本研修に私をご推薦頂いた長谷川副院長、そして、不在期間の業務を負担していただくことになるにも関わらず、快く私を研修に送り出してくれた辻江肝胆膵外科部長、若杉先生をはじめとした大阪労災病院外科の皆様へ心より感謝致します。この研修で学び・経験することができたことは今後の外科医人生の大きな財産になると思います。

